
新世界の車窓から

take12345

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

新世界の車窓から

【Nコード】

N9824Z

【作者名】

take12345

【あらすじ】

A列車のファンタジー版という感じです。
主人公は列車や線路を出す魔法が使えます。
開拓や人々の手助けをして、いろんな亜人種達を取り込んでいきます。

■ 01 おわり ■

あと数日で隕石群が地球に衝突することが分かり、すでにいくつかの小規模隕石が世界中に降り注いでいた。

世界中で暴動が発生する中、ある夜眠っている人たちの夢に天啓が下った。

それは、「選ばれし12人がそれぞれ別世界を創造し、そこへ行けば人間は助かる」というもの。

それを知らせてくれたのは、人によって姿が全然違いあるいは声だけの場合もあったが、総じて事実だと直感した。目覚める直前その12名の顔が浮かび上がった。

翌朝、世界はこの事で更なる混乱に陥った。

昨晚眠った人は全てこの夢を見たからだ。

人類存亡の危機なのだから必死だった。

ほどなく12人全員見つけた。

英語圏から3名

アラブ圏から1名

ロシアから1名

中国から2名

インドから2名

韓国から1名

日本から2名

選ばれし12名はこの別世界に関して心当たりがあった。

彼らは、この啓示がなければ身近な人だけをつれて旅立つ予定だっ

ただ。

なぜなら、彼らはこの世界へ何度か行き来し、選ばれし12名の内何人かは少人数が生活する程度には整えて自らの別荘のように扱っていたのだ。

しかし、大勢が暮らせるほど整えられていなかった。

それならば、これから整えればいいと考えられるかもしれないが、選ばれし12名が創りし世界へはゲートを通らねばならない。

そして非常に厄介な事に動物以外が通過することができないのだ。

何一つ持ち込めない。

食糧どころか、服すら不可能で、

通過するには裸で通らなければならなかった。

さらに厄介なことに、本人以外の一度通過した生物は二度と出る事ができなかった。

その為、それまで軽々しく他人を呼ぶ事はできなく、創造者が個人的に楽しむに留まっていた。

12人は新しい世界の創造者であり、わたる先の世界はもともと存在する別の何処かでは無かった。

その為、それぞれ全く違う風土、地形、さらには支配する法則が違っている。

なぜならそれらの世界は創造者の知識と夢と無意識が創り出したモノだからである。

人類が積み重ねてきた英知が通用しない可能性が大きい。

元始的なものなら幾らか通用するであろうが。

当然、創造者と同じ言語を扱える人が殺到する。
しかし、人種の保存のため、
多様な人種を幾らか分散させようという知識階級者達の勝手な取り
決めもあった。

全世界放送により、創造者達がテレビで自分たちの創りだした世界
についての解説を懇願された。
解説した内容は驚くぐらい全く違う地形、世界を示していた。
みんなゲート付近の地形しか知らない為、実際の所、同じような場
所があるのかもしれないが。

ある者は、見渡す限り砂漠で、ゲートから1 km圏内に巨大なオアシスがある。

ある者は、熱帯雨林で、無数の大河が確認され、地球に存在しない生物がいる。

ある者は、空に浮かんだいくつもの島の一つにゲートが現れた。

ある者は、サバンナのような平原が広がっていた。
などである。

そして共通するのがどの世界でも彼ら創造者は絶対者と呼んで差し支えない存在になっている事である。

その世界における彼らは、怪我することも飢えることも老いる事もないという。

日本の創造者の1人である小森正平こもり しょうへいの世界は、ゲートから出ると林
程度のあまり深くない森が続いていた。

少し行くと美しい清水の湧く岩場がある。さらに先にはなんと、
ファンタジーで有名なエルフの集落があった。

正平は、彼らの言葉が分かり、彼らも正平が世界の創造者と気付いたらしかった。

すぐに打ち解け、自分で創ったはずなのにどういう世界なのか分からない正平に、

世界について彼らが知っている事を教えてくれた。

そして驚くべきことに、魔法が存在したのだった。

エルフは歓迎の証に貴重な魔石を分けてくれた。これは魔法を習得するための希少な鉱石だった。

これにより、正平は3つの魔法が使えるようになった。

創造者たちの解説はどれも驚くべきものだったが、

正平の創造した世界の解説がもっとも世界を驚かせたであろうことは疑いなかった。

他の世界ももっと調べる事ができるなら、それ以上に不思議な可能性は当然あるが、

分かっている段階でここまで突拍子もないのは正平の世界だけだった為である。

数百本のマイクとカメラ、それに大量の同時通訳。

それぞれの創造者の活動拠点近くに急遽作られたスタジオ。

すでに、かれら創造者と懇意になろうと王族や、各国首脳が近くに陣取っている。

あの天啓の下った次の朝は、家の前に大勢の人ばかりがあったのを今でも鮮明に覚えている。

どれもこれも必死に押しかけ、創造者達は自らの命の危機を感じ取るほどだ。

だが、すぐに警察、そして自衛隊が駆け付け、正平の守備にあたった。

ほどなく、世界各国は創造者達から世界の特徴、一度はいれば二度と出れない事、

裸一貫でしか入れないこと、さらに創造者ごとに世界が違ふ事などを聞いた。

人々はこの世界に行くべきか、それを創造者に創った世界を紹介してもらい、

人々に選ばせるという方策をとった。

創造者が世界各国奇麗にばらけた為に、悩むまでもなく自らの近くに住んでいた創造者のところを選ぶのがほとんどであった。

世界滅亡までもう僅かな時間しか存在せず、小規模の隕石が絶え間なく降り注いでおり、

ところどころ交通も麻痺しているため、選択の余地もあまりなかった。

それに、恐らくは創造者が使う言語が新天地での標準語になるのはほぼ確実である。

しかし、それでも偏りは存在した。

ゲート付近が砂漠や、寒冷地の世界は不安であったため、人気が少なく、

逆に正平の世界は、すでに飲み水が確保でき、

さらに先住民が居ると言う事が分かっていたためにずば抜けた人気があった。

もう一人の日本出身の創造者である佐々木玲子ささき れいこも自分の世界より正平の世界へ行きたがっていた。
彼女の世界は、美しいが、険しい山の頂にゲートが出来た為、探索した範囲で生活するにはとても厳しいことが確定していた。

正平の世界はほとんどの人がファンタジーの世界を想像した。
その為、発展すれば今の世界よりも良くなるのでは？という予想を立てる人も少なくなかった。
実際、一番夢のある世界と言えた。
他の世界ももう少し探索すれば、そういうものを発見できたかもしれないが、
現状それを確認できたのは正平だけであった。

12人の放送が終わった後も、チャンネルごとに創造者のインタビューがループして流れており、
時折その世界の解説が挟まれた。

放送終了後から、正平の家、街、には大勢の日本人、いや世界から来た人でひしめき合った。

ゲートは何度も開閉することはできない。
一度開くと次に開く事が出来るのは数日後だという。

創造者の1人がいろいろ実験して詳しくわかった一つの事実がある。
ゲートは、一度に最大5時間程度しか出現させられず、連続で5時間開けた場合およそ2週間の
インターバルが必要だということである。

2週間後では、地球からほとんどの生物が絶滅しているのは疑いなかった。

ゲートの大きさは、精々家の扉程度の大きさ。同時に通過するにも2人が限度。

それが、絶え間なく5時間開けっぱなしでも通過できる人数に限りがあるのは明白であった。

そのため分散することを呼びかけた。

ゲートのオープンは、世界同時に行われることとなった。

正平の周りには、家族、親戚、同級生、親の会社の同僚。そしてそれらの知り合いと

正平の知り合いの知り合いで溢れかえった。

正平に限らず世界中の創造者の周りはそうなっているであろう。

さらには、正平には世界の富豪や王族がたくさん押し詰めていた。

彼らは、既に日本語の勉強を必死ではじめている。

生物なら通れるということで、次の世界で食糧となるべく家畜の手配もしていた。

わざわざ自分の文化圏を選ばずに正平を選んだ辺りは、彼らの勘がそうさせたのだろう。

選ぶ基準は世界だけではない。創造者の人格もまた基準であった。

なぜなら、創造者達は彼らの創った世界においては、

夢の内容から不老不死など特別な力を有しているらしい。

それはつまり彼らがそれぞれの世界で頂点に立つことを意味している。

ならば、この最初で最後の君主を選ぶ機会に妥協は許されなかった。

ゲート作成予定地の広場には、動く歩道が設置され、馬、牛、羊、鶏と

最も人類のノウハウが蓄積された家畜が揃えられた。植物の類がゲートを通過できない為に、当面の食糧としても非常に重要であった。

もちろん、世界12か所のゲート予定地にも同じように家畜がスタンバイしている。

食糧は現地で調達する物以外は生きた家畜のみである。

現地で個々人が探索した範囲ですぐに食糧を調達できそうなのは、正平を入れて6人だけであった。

他にも、ゲートを出た先では丸裸な為、羊の毛がとても重要な意味を持つ。

有識者の間では、カルネアデスの板計画と呼ばれていた。

なぜなら、結局5時間ではいれる人数は、どう工夫しても全人類には及ばず、

又、丸裸の状態から安定した食糧も無しに全員が生き残れるはずがなかった。

なので、実際にはゲートは数回にわたって、開かれ、先遣隊は実験的な意味合いで送られると一般的には知らされていた。

しかし、現実には連続5時間の1度こっきりである。

聡い人、創造者に近い人、ずば抜けて偉い、いや偉かった人たちだけが知っている。

他にも、家畜の世話に長けた人、炭焼きや昔ながらの農業を営んでいる人々、

現代の科学技術に依存しない技術を有するある意味で元始的な生活が幾らか可能そうな人たちが優先されていた。

持っていける物は、生き物と知識だけ。先遣隊に対してサバイバル講習が行われ、

何もない状態でも最低限生きるのに必要な知識が共有されていた。

パソコンどころか本もノートも持ち運べない為に、家畜や人間の体に文字を書く。

しかし、これらはゲートを通ると消えてしまうのだが…。

そんな準備が12か所で行われ。運命の時間がやってきた。

向こうへ行けばしばらく食事が出来ないだろうことから、この世界で最後の食事をお腹いっぱい食べていた。

空は、無数の小さな隕石で昼間だと言うのに彼方此方で大気圏で燃え尽きる光を確認できる。

あるいは燃え尽きず、遠くの方で大爆発を起こした音が耳に届く。もう一刻の猶予もない。

みな、一斉に服を脱ぎだした。下着も脱ぎ皆すっぱんぼんだ。

秋が過ぎ冬に差し掛かるうとしている為非常に寒い。

老若男女すべて。恥かしいなんて言っていられない。

生死どころか人類存亡の危機なのだから。

虹色の厚さ1ミリにも満たない長方形のゲートが出現した。

同時に歩道は動き出す。

先頭には、正平と、その家族、正平が予め部下として選んだ者達、学校の友達、近所の人たち、会社の人たち、その知り合い、

家畜と酪農の技術者を持つ者達、王族に権力者、サバイバルの技術者、そして正平を選んだ世界の人たち。

そのような順番でゲートに入って行った。

元の世界でゲートの外の事について知っているのは当然正平だけである。

なので、一番初めに入り、次々に出てくる者たちを案内する必要があった。

家族が出てきた次に出てくるのは、正平をサポートする者たち。

彼らも初めて世界に踏み込むのだが、いろいろ正平から出た先のことを聞いており、

すぐに正平の手助けが、出来るようになっていた。

彼らはこれ以降も死ぬまで正平の部下として働く事が決定づけられていた。

正平は元より、出てきた家族もみんな素っ裸であった。

しかし、予め正平の服だけは用意されていた。

エルフの編んだ服である。

正平以外の分は無い。頼めはあるが、エルフにとって正平以外はどうでもいいどころか侵略者である。

この世界では、正平とそれ以外は大きな隔絶が存在する。

それには、みなおいおい気づくのだが、このときはまだ誰も知らない。

まず、すぐに家族をゲートから引き離し、少し先にある広場に待機するように言った。

すぐに、正平をサポートする人10名。通称近衛隊が入り、ゲート付近に5名待機し、

誘導場所を確認するために残り5名が走った。

正平の関係者をまず正平の家族を誘導した付近に全員集め、

次に家畜を予め決めておいた低地へ誘導した。

そして次々に侵入してくる人々を各エリアが大体1000人超える毎に時計回りに誘導先を変え、

1000人集まった集団はその場から離れて次の1000人がその場へスムーズに行けるようにする。

これが5時間ぶつ通しで行われた。

続々と裸の人間が詰めかける。

そして5時間後ゲートは閉じる。

予め通過できる人数を計算し余裕を持って選ばれていたために、ゲートが閉じる数分前に侵入する人間の列は途切れた。

しかし、鋭い感を持った数名がゲートの閉じる直前に滑り込んできた。

ただ見物しに来た大勢の人の内数名かがそれをみて、最後のチャンス逃したことに気付いた。

しかし、もう二度と地球上でゲートが開かれることは無かった。

■ 02 そこから新しい文明が始まった ■

正平の周囲3mから周りを取り囲むように人垣ができた。

正平の世界を選んだ人たちだ。

その数実に8万人。

7万人ほどが日本人で、あとはそれ以外の人達である。

日本以外の人々は総じてそのファンタジックな世界に惹かれてきた人々だ。

それも、一刻も早くその世界を見たいという種類の人たちであった。しかし、その趣向が彼らを滅亡の危機から救ったのだった。

正平の周りにはいまだ裸の状態の人々がこちらに視線を向けている。その光景は一種異様で、中学2年生である正平には恥ずかしいものだった。

それよりも大勢の人から注目される状況からくる緊張感の方が上回っていた。

正平はこの世界を選んでくれた人々に感謝と、励ましの言葉を送った。

それは、中学2年生にしてはなかなか立派な挨拶で、近衛の人から徐々に拍手の波が広がって行った。

正平の習得した魔法は3つ。実はかなり実用的なものだった。魔法がどのようなものかは実は誰も知らない。

<列車・顕現> MP2000/1車両

<レール・顕現> MP25/1m

<駅・顕現> MP9000/1駅

正平の最大値 MP 500000（半日で全回復する。ただし精神力の消耗は別）
人間の最大値 MP 10

これを魔法と言っているのか、これが出来た所で魔法の世界と言えるのか難しいところである。

しかし、エルフ達に見せてもらった魔法は炎を出したり、植物のつるを操ったりと

非常にファンタジーなものだった。

とにかく魔法を発動することにした。

大衆が見守る中それが行われる。

まずは、レール。

二本の鉄のレールが出現し、その下に石の敷物と大きな砂利が敷かれていた。

正平が手をかざした先へグングン真っ直ぐに伸びていき、途中塞いでいた木は消滅し、

丘に沿って伸びること無く、丘自体も消滅し、溪には鉄橋がかかり、山はトンネルが掘られた。

完全に真っ直ぐ伸びるため先が見えるのだが、あまりにも先の方まで伸びたために

最終地点がとうとう見えなくなった。

実際は見えなくなったところで魔法の効果が届かなくなっていた。

それを見ていた大衆からはどよめきが上がった。

予め、この列車関連の魔法しか使えないと最初の挨拶で説明していたのだが、

かつての地球で、いったん文明がリセットされると何度も喧伝されていたため

（ぎりぎりまで文明を味わい、最初で最後の先遣組に志願させない
為でもあったのだが）

少なくとも自分の代で、もう文明に触れるのは不可能と思っていた
人々は

見慣れた文明の一端を垣間見、大きな希望と、正平を選んだ自分の
選択眼の正しさに
喜びを抑えられなかった。

レールは隣にももう一つ設置し、上下線分設置した。
あとで、増やすと面倒な為に最初から2本設置することにしたのだ
った。

そして次に駅を出現させた。
大した造りでは無かったが、0からスタートする人々にとってはこ
れ以上ない拠点と言えよう。

改札などの機械的なものは一切なく、ただ、向こうのホームまで続
く階段と通路があり、
とうぶん雨風を凌ぐためには十分と言える。

駅が出現した時にわざわざレールも4本に分岐されていた。
これは、駅に停車する列車と通過する列車の為のものだ。

そして、最後に列車である。
レールの上に、ブルートレインのような列車が出現した。
これには、本当に大きな歓声が上がった。

なぜなら、その列車で暮らせるのだから。
中は、すべて寝台が設置されており、いきなり近代レベルで寝泊ま
りできるスペースが出現したのだ。
その後も次々と列車を出現させていく。

全てに動力はついているようだが、運転席のある車両だけが操縦できる。

もとの世界の列車のように電力で走るというわけではなく、どうやら魔力を消費して走るらしかった。

大容量をもつ魔力バッテリーが内蔵されており、正平は魔力を満タ
ンまで補充できた。

10両編成が完成することに、裸の人々を中へ入れて、操縦方法を
教え少し先の方まで運転させた。

一つのベッドに最低でも2人以上乗ってもらい、早い段階で全員に
いきわたらせるようにした。

ベッドには掛け布団があり、衣類の代わりに利用した。

正平は、何度かこの魔法を使っており、ゲートからはかなり遠い場
所で

この魔法を試していた。

それで、なんとなく気にいらなかったのですぐに消滅させた。

同じ魔法で消滅させる事もできたのだ。

ちなみに、この世界では生物はだれしもMPを持っている。

ただし、才能のように個人差があり、人間は平均して10ぐらいで
あった。

そしてこの力は12時間で全回復するらしい。

正平のMPは現在50万ぐらいである。それは彼がもはや人間では
なく創造神であると言う事の査証といえた。

正平自信も未探索の領域にレールを掛け、一番最初に創った車両に
乗り込み、どんな地形が見て回ることにした。

ある程度離れたところで、大きな湖の近くに来た。
水も綺麗で飲めそうなので、そこを拠点にすべく2つ目の駅を造った。

そしてまたしばらく行ったところで、広い沼地が広がっていた。
近くに稲のような植物が生えていた。

ひよっとすると元の世界の物と同じような物で食糧となる穀物かもしれない。

そういう期待もこめて、3つ目の駅を設置した。

次に鉄橋を渡り、トンネルに入った。中は光源がない為真っ暗だった。

そのまま結構な距離を通過し抜けた先は、左手に巨大な湖、ひよっとしたら海かもしれない

水平線が見えるほどの巨大な水たまりが広がっていた。

魚介類が調達できるかも知れない。

トンネルを抜けてしばらく砂浜が伸び岩場に差し掛かったところに4つ目の駅を造った。

さらに先へ行くと、水たまりが突如終わり、草原が広がっていた。
家畜を飼うには非常に良さそうなどころだ。

もう少ししたところで、レールは終わっておりここら辺に5つ目の駅を造って

今回はここで終わる事にした。

それぞれ

1、始まりの駅

2、美しい湖の駅

3、稲穂の駅

4、海の駅

5、草原の駅

と名付けた。

草原の駅に8万人全てを集めて、今後の方針を決める事にした。草原の駅には駅を設置する直前にレールを並列に複数置いた為、出来た駅はかなり巨大なものになっていた。

家畜用に出した、消費する魔力を抑えることで造り出せる貨物列車に収容し

すでに放牧を開始していた。

そこから中に生えている草をちゃんと食べていた。

住む場所も重要だが、もっとも重要なのは、水と食料であった。

水は問題なさそうだが、食糧の調達が目下の急務である。

家畜は食糧として大量に消費されることが予想されていたために、かなり多めに持ってきていた。

それでも、8万人もいればそれほど持たないことは目に見えていたし、

食糧の現地調達が可能かどうか不明なので増やしたかった。

海の駅の近くの広大な水たまりは塩分を含んでおり、暫定的に海とした。

湖は真水であったために、これを飲み水とした。

今のところ、飲み水が調達できるのは、始まりの駅の清水と、美しい湖の駅の湖だけである。

ここを拠点とし周囲の探索をすることが決まった。

服は、ブルートレインにあった掛け布団を体に巻くように使った。

これらは、居住区が列車や駅から外れた人、探索の任務を帯びた人に優先的に充てられた。

他の人は葉っぱと蔓を使って局部だけでも隠せるようにした。

そして、刃物として使えるようなモノが見つかり次第、羊の毛から服を作る予定である。

エルフの居住区を知っているのは、まだ正平だけである。

これは正平がエルフと連れてきた人間両方に配慮した為である。

エルフとの交流で知ったことは、出会えば多分人間が殺されるだろうと予想してのことだ。

正平の言う事はたしかに聞くが、厄介事になるのは目に見えていた。

正平は、＜列車・顕現＞の魔法を重ねがけすることであるんな種類の列車が出せることに気付いた。

それにより、タンクを積んだ車両が出せた。これで、水を吸入し、水の調達が面倒な遠隔地にも拠点を置く事ができるようになった。

家畜を消費しない、鶏の卵は非常に貴重な食糧元であった。

出現させたレールなどを駆使して、フライパンのようなものを造りそこで卵を焼き

僅かずつを全員に配った。

牛の乳も重要な栄養源となった。

早急に現地で調達できる食糧を見つけないといけない。

野生の動物に、魚、自然になっている果物なんかをまずは見つける必要があった。

海で魚介類を食べられる魚介類を調達する班を1組10人、100班。

かれらは先に森へ行き、道具の調達した。

サバイバル経験者を1班に最低1人を組み込ませ行動を開始した。

次に、自然に生えている果物の調査、生態学者をそれぞれの駅の1人づつ配置した。

そして、それぞれの駅から、森の方へ目印を付けつつ食べれそうなモノを見つける探検に出かけた。

どの駅からも10班ずつこちらにもサバイバル経験者を最低1人入れて出発だ。

次に岩場から刃物の代わりになりそうな石を調達する班が3組。

葉っぱを束ねて服を造る班を20組。

燃料の薪を調達する班を10組。

試験的に居住区を造る班を全ての駅にそれぞれ2組ずつ。

あとは、家畜を見張る班に、その他の雑用や取り決めをする班などに分かれた。

組織図も正平を頂点に、サバイバル経験者やもとの指導者であったものなどが

比較的ヒエラルキーの上層に来るように配置した。

班のトップである10人長、それをまとめる100人長、さらに上に1000人長

そして、近衛が事実上の10000人長という感じである。

ただし、今のところそれぞれの長が10人に指示を出しました10人

に指示を出すと言っただけである。

近衛は10人居るために、7人が10000人長、3人が正平の直接のサポーターである。

正平の家族だけが組織図から外れていた。サポーターの近衛1人が彼らをまとめてくれている。

100人グループの中になるべく一家族が収まるように配慮された。しかし、1班ごとにやる事が決まっており、なるべく作業に沿った人選がなされる為

1班に1家族が収まる事は滅多になかった。

一時的な住居として10班、つまり100人ごとに1車両を占領した。

あぶれた班は、駅の屋根のあるスペース。それでも無理な場合はとりあえずホームである。

草原の駅は全ての車両が収容できるように造った為に、建物部分が大きく、かなりの人数が収容できた。

駅から東へ行ったところに川が発見された為に、いよいよ人類の拠点としての色合いが強まってきた。

線路や列車をじゃんじゃん追加したいところなのだが、

魔力を消費するとき同時に精神力のようなものも消費するらしく、そうそう連続で出来ない事が判明した。

恐らく何度か使う内に慣れるのだろうが、消耗する精神が及ぼす苦痛は、

少なくとも普通の人間が死ぬレベルである。

刃物がなければ家畜の解体も一苦勞である。それどころか殺すこと

すままならない。

最初皆が口にできたものは、海で取れた海藻と小さな蟹に二枚貝、いくつかの探索隊が見つけてきた果物だけであった。

それらはあえて全体で分けるようなことはせずに、1000人ごとのグループで分けることにした。

そして、それらを物々交換で他の物と交換できるという形をとった。これによりある程度の成果主義をとるものとした。

食糧の調達班の割合が少ないグループが不利になってしまったために、取れたものの何割かを徴収し、

それらを調達班の少ないグループへ割合に応じて還元した。

貨幣の代わりになるものを探した。

とりあえず人類の歴史に倣って貝殻で代用することにした。

家畜はとりあえず正平の所有物とし、飼育員も特別な1000人のグループに振り分けた。

やはりまともな服がないのは致命的な問題だった。

鋭利の葉で傷だらけになる人、擦り傷からたちまち破傷風に掛かる人、

服が人類にもたらした恩恵の大きさを噛みしめさせられた。

正平はエルフの集落へ赴き機織り機を譲ってもらうことを提案した。しかし、世界の創造者たる正平は人間もエルフも対等で同じぐらい大切に感じていた為に、

ただ譲って貰うということに強い抵抗感を感じた。

よって、連れてきた家畜とその技術者の派遣を交換条件に提示した。

エルフは、承諾し、鶏の10羽と交換するという約束をしてくれた。草原にそれぞれ出来つつある粗末な柵の囲いの一つから管理者にこの事を伝え、

技術者1人と共に鶏10羽を持ちだし列車で始まりの駅まで運んだ。

そこで初めてエルフは正平以外の人間を見た。正平が間に入らなければ

その粗末な姿に脆弱な魔力、弱そうな躯体に確実に殺すほどの生物的な差を感じたが

正平という絶対者の頼みでしかも公平な条件に承諾した。

それでも、エルフの活動領域に正平と伴わず許可なく侵入した場合は、

命の保証は無いということを伝えた。

正平は、仕方がないと現状のエルフと人間の生物的、文化的な格の違いが理解できている為に承諾した。

その事を伴った近衛に伝えた。

エルフと人間の使う言葉は違った。

正平はエルフの言葉は分かるし、エルフも正平の言葉が分かったが、どちらも言葉に魔力を持たせ単なる記号付けの音でなく、力を持った言霊として会話出来る為に

日本語で石と言っても水のつもりで発声すればそのように伝わるのだ。

それでもエルフは普段はエルフの言葉でしゃべっている。

しかし、感の鋭いエルフは相手が必死に伝えようとすれば、元の世界で違う言語を操る者同士の

ジェスチャーを交えた会話よりもよほど理解が早かった。

正平と1人の技術者と鶏10羽による初めての人間とエルフの交流を記念してささやかな宴が行われた。

食べるものは薄味で濃いものになった人間の舌には物足りなさを感じすることもあったが、

この世界へきてまともな食糧がなかなか手に入らず腹をすかしていた技術者と

近衛達は久しぶりの満腹感に頬と涙腺が僅かばかり緩んだ。

技術者は自らの使命の重大さを十分理解していた。この世界で、いや人類史上初めての

人類以外との交流となるのだ。

ちなみに正平はもはや人間とは言えない。出自が人間の人間に味方してくれる創造神である。

技術者とエルフの交流が上手くいけば次の段階である物々交換を始めたいと思っていた。

まだ、試験的に代用通貨として海に落ちていた綺麗な貝殻の運用を始めているが、

まだ物々交換が主流だし、エルフ自体が物々交換を行っていた為、最初の市場で行われるのは物々交換が主流となるだろう。

宴を終えて一晩泊まり、帰りには機織り機を運ぶ近衛と、

その使用方法を伝えるべく遣わされた美しいエルフを1人伴って始まりの駅にやってきた。

どの駅にも何人かの人が常駐しているし、駅を拠点に探索を行っている。

始まりの駅は、エルフの集落に一番近い為に、予め探索範囲を制限している。

その為に常駐する人数は他の駅よりも少ないが、それでも人は居た。エルフを初めて見る人々はその美しさに目を奪われ、みな恭しく挨拶を交わした。

言葉はわからなくてもエルフはそれが友好的なものであることは理解した為にほほ笑みで返した。

しばらくして列車がやってきた。話に聞いていた正平の魔法で顕現したモノだ。

エルフは、その巨大さ、纏う魔力の膨大さに正平の偉大さを感じた。人間なぞよりも自分たちの指導者になって欲しいと思い、人間に嫉妬を感じた。

正平一行は列車に乗り込むと一気に5つ目の駅「草原の駅」まで列車を走らせた。

窓から見える景色にエルフは楽しそうにはしゃいだ。

エルフは、元の世界では人間達がこれを造っていたと聞き、人間の評価を数段階引き上げた。

エルフは、人間を大事にする正平の意図を理解したのだった。

正平の乗る列車は他の列車とデザインが違う。

黒い外装に金色の模様で装飾されており、あたかも王の専用列車のような風体である。

内装も豪華で高級なホテルを思わせた。

製作に掛かる魔力も通常の十数倍かかる。

この列車は現在2車両だけ製作されており、ロビーと食堂用の車両、寝泊まりするための車両となっている。

現在正平以外では家族が許可なく利用する事を許されている。そして通常は、正平とその許しを得てお供する者だけが乗車を許された。

この技術者の交換と機織り機と鶏の交換は8万人の全ての人間に知らせていた。

それぞれ拠点とする駅に集まり、正平とエルフの乗った列車を歓迎しようとホームに多くの人が詰めかけていた。

窓を開け正平とエルフは人々に手を振りそれに答えた。

エルフも友好的な振る舞いをする彼らに少なからぬ好感を抱いた。それと同時に粗末な葉っぱでできた服を見て、哀れに感じた。

エルフはしっかり技術を伝えようと決めた。

エルフの名前を日本語や英語で表現するのは難しい。

そのため、近い音を拾いニエルと名載ってもらうことにした。

正平が付けた名をニエルは気に入ってくれた。

草原の駅につき、たくさんの人に囲まれて粗末な食事によるささやかな宴を行った。

翌日から機織りの指導が始まる。

岩場から刃物に変わる堅く鋭利な刃物を多く調達されていたが、エルフから特別に鉄製のナイフを下賜され、それを使って羊の毛を狩りだした。

羊の毛でもエルフを利用する野獣の毛の代用が十分可能だった。羊毛関連の技術者が集まり、どんどん毛が狩られ羊毛が集まってく。

折り機の技術者達はエルフから機織りの技術をどんどん習得してい

った。

僅か数時間でほとんど習得してしまった人間の技術者達を見て、彼らが高い知性を持った生物であると理解した。

エルフはあまり情報を提供したがない。聞かれれば答える事もある程度である。

そんなエルフが貴重で重要な重大な情報を齎した。もたら

なんと、エルフ以外にも亜人種族がいるらしい。

ほとんど交流はないが、彼らの造るものの出来が非常に良い為に、閉鎖的なエルフをして極たまに物々交換をするという。

鉄製のナイフも彼らが製作したものだった。

その種族の特徴を聞く限りそれはドワーフだった。

そして、エルフがその種族を口にした時、予想通りドワーフのイメージが言葉とともに流れてきた。

正平がこの世界で最初から知っていた種族はエルフだけである。

エルフにも話す内容に好き嫌いがあり、エルフや自然、地形や魔法とあまり関係ないことを話すのが

好きでなさそうだったため、他種族の事は聞いた事が無かった。

しかし、道具がどうやって造られたのかその調達方法に話が及んだ時にこの事実が発覚したのだ。

すぐさまドワーフと交流を持つべきという意見が出た。

当然正平が介入すれば、交流が成立するであろう。

ドワーフといえば有能な鉱山技術者であり、又有能な鍛冶師である。

金属が人類にもたらした恩恵は凄まじい。

列車とレールは見た目には金属なのだが、金属製の他の用途で利用すると暫くしてぼろぼろになる。

どうやら決まった用途で出された魔法は用途から外れると魔法の効果が弱まりやがて消えてしまうようだ。

その為どうしても現地で採集できる金属とその製品が欲しかった。

ニエルによると、旅のエルフは草原の何処かに忽然と鉱山がありそこに集落を形成しているらしい。

旅をする変わり者のエルフが齎した情報だという。

草原はかなり広がったが、丁度線路を伸ばしている遙かな先に僅かな地形の変化が見て取れる。

ひよっとしたら、それが件の鉱山かもしれない。

早々、線路を伸ばすことに決めた。

機織り機による服の製作は日産10着程度である。
装備した人間の活動力は飛躍的に向上した。

機織り機は交代で休むことなく織り続けられた。

平行して、絞めた家畜の皮を利用し靴を製作した。

現在家畜はおよそ

鶏 2000羽

羊 1000頭

牛 250頭

馬 100頭

である。

あぶみ無しで馬に乗る事は困難である。

最近ようやくそれに耐えうるものが造られ始めた。

乗馬も徐々になされていく予定である。

草原には、遠方に敷いたレールと並行して川が流れていた。

ここから飲み水を調達しつつ、近くに畑の製作が検討し始められていた。

まともな農具はなく、木片を使った効率の悪い仕事であるが、徐々に畑らしいものが出来始めると、それを見る者全てに大きな希望をもたらした。

食べる事のできる作物をいくつかエルフに聞く事が出来た。

それらを森から採取し、食糧にしつつ一部を畑に植えかえる。

種が採取できれば残らず耕して空気を含むフワツとした土に埋め込んでいった。

果物のなる木もいくつか発見された。どれも見たこと無い形状をしている。

味はどれも薄く酸っぱく僅かな甘みがある。そしてとても匂いがする。

品種改良されたものになれた現代人にとってはおいしいと感じにくいものだが、

現地で採れる貴重な食糧であった。

非常に温暖ですごしやすい気候であったが、抗生物質も薬もない世界では

家畜も人も抵抗力の弱いものから順に死んでいった。

ある程度覚悟していたことだが、順当に老人から亡くなっていく。人々の価値観も徐々に変わり世界に慣れ始める。

死が当たり前の物として身近にある事をだれしもが実感していた。

野獣が出没する。

大した装備を持たない人々は簡単に犠牲になる。

家畜も目を離すと一気にやられることがあった。

正平が草原の駅付近に居る間は、

その膨大な魔力の気配に野獣は近寄らず被害はほとんど無かったが、しばらく別のエリアで滞在すると一気にやられた。

柵が完成するまでは正平になるべく草原の駅付近を拠点に動くようにした。

■ 03 ドワーフ ■

正平は、遠方に見える隆起を目指して線路を延ばすことに決めた。強力な魔力の波動が正平を中心に台風のような規模で拡大していた。

辺りを伺う野獣達はその異常な力に慄き、遠方までその身を後退させた。

次に、線路の延長線上に魔力が流れ始めた。

それはあたかも大雨が降ったあとの川の濁流のように。

やがて、草原の駅で終わっていた幾股にも分岐した線路は2本に集約され、

そのまま遠方へ伸びていった。

魔力には余裕があったが、同時に精神力を消耗し、軽いめまいを起こした。

ただ、正平だからめまいで済むのであって、普通の生物ならたとえその魔力を持っていたとしても
発動後は発狂し死ぬレベルである。

黒字に金の模様を纏った二両の正平専用電車で出来たばかりの線路を走り始めた。

中に乗るのは、正平と近衛の3人である。

ちなみに、正平の家族は両親に妹1人だけで、新しく造ったVIP車両で暮らしている。

VIP車両は1日1台だけ造り、有益な発見や大きな成果を上げた者を優先してあてがうことにしている。

家族と近衛以外は1週間限定としている。

VIP車両はブルーの外装で全ての駅に1台設置され、残りは全て草原の駅に配置されている。
草原の駅の一番外側の線路を1本伸ばし、そこに延々とVIP車両を追加しているのだ。
駅のホームから乗りこむ事ができ、車両ごとに分離し、1車両につき1家族が暮らせるようになっていてる。

正平専用車程ではないが、それでもホテルの1室レベルの室内に初めて入った家族は、
忘れかけていた人類の文化を思い出すような思いだった。
そしてそれを一度味わうととても手放したくない。駅の構内での雑魚寝や寝台車に比べる事も出来ない。
そしてそこからすらあぶれた人にとってはまさに天国である。
さらに必死に働こうとした。

もはや、正平は人々にとって神と同義であった。
実際世界の創造者なのだからその通りではあるのだが。

正平自身は、A列車やシムシティのようなテレビゲームをリアルで体験している気分だった。
段々、人々が自分と違うもののように感じ、無理してまで彼らのために能力を使うつもりは無くなっていた。
実際、精神を消費するのは並大抵ではない。可能なだけ、許容できるだけで、
人間が死ぬレベルの苦しみを味わっているのだ。

彼が魔法を使うのは、彼自身の好奇心や実行したいという気持ちがその苦しみを上回った時だけである。
あるいは、その苦しみを僅かばかり忘れた時であった。

それなら徐々に線路を延ばせばいいのかもしれないが、ものすごい距離をちまちまやるのも

別な苦痛があった。一気に伸びる爽快感を知ると面倒になるのだ。たとえ苦しみと引き換えであつても。

線路は何処までも続いた、なぜなら超絶の苦痛と引き換えに遙か地平線まで一気に伸ばしたためだ。

何処までも広がる草原の景色と、遙か地平線から連綿と流れる優しい風を受けて

ゆっくりと電車は進む。正平がのんびりと楽しめたかったからだ。

同乗するのは、近衛の3人。内1人はエルフのニエルである。

機織りの技術をとくに伝え終わったのだが、ニエルが正平に忠誠を誓い、

正平もそれを許したために11番目の近衛となった。

正平自身、普通の人間よりも確実に役に立ちしかも美しいエルフが自ら役立ちたいと言ってきたので断る理由もなかった。

ニエル自身も偉大な創造者に仕える事が出来て非常に満たされていた。

この事は、ニエルが一度集落へ帰り伝えている。

集落のエルフ達も非常に喜んだ。

しっかり仕えるようにニエルも念をされた。

エルフの集落へ派遣された人間の技術者も集落が気にいったらしく仲良くやっていた。

ほぼ毎日卵を産む鶏はエルフ達に大事にされていた。有精卵のいくつかが羽化してひよこが誕生していた。

エルフの子供たちがひよこと戯れる姿は美しくも微笑ましい。

草原を走る列車の前車両はいくつかの窓を開け放し、気持ちのいい風が車内を通り抜けるのを
楽しんでいた。

あまり森から出ないエルフには草原の風が珍しくも心地良い。草原の風も悪くないと思っていた。

人間二人の近衛はそれぞれ、日本人と白人の20歳ぐらいの男性である。

彼らもまた正平に絶対の忠誠を誓っていた。

それは近代の会社の上司と部下のような関係ではなく、中世の王と騎士のような関係であった。

あるいはそれ以上かもしれない。

近衛の家族には全てVIP車両が宛がわれている。

エルフのニエルにも1車両専用車を下賜されたが、そこはいまだに利用されず

ずっと正平と供に行動していた。

ニエルは正平の家族ともそこそこ仲良くしている。

ニエルは正平と同じ年代に見える。だが実際の年齢はかなり年上だそうだ。

変わり映えのない草原の景色も、遠方では見たこと無い動物を見かける。

細い幹に大きく広がる枝はの部分を持つ木が疎らに生えている。サバンナに芝生を敷き詰めればこの光景になるのかもしれない。

強烈な魔力の波動のせいで危険な野獣だけでなくあらゆる生物が遠くへ逃げてしまった為に

動物を見かけることはなかった。ただ、遠方にそれらしい群れを確認することができた。

列車だけでなく線路にも魔力が通っている為に、近くまで動物が来る事はないが、

膨大な魔力の波動はレールを造ったその瞬間だけなので、そのうち見える範囲には来てくれるかもしれない。

車両の先頭で、淡く輝く魔法陣が描かれた小さな台の上に手を掲げて運転する近衛の白人が

件の山が目視できるところまで来た事を告げた。

彼は流暢な日本語を話せる。それどころか英語とその他4ヶ国語を操れる。

この世界では正平が日本人の為に日本語が基準となる。

その為、習得した高水準の語学力が生かされる機会はないが、その知性は存分に発揮されるだろう。

ただ、すでに亜人が確認されている為に、正平以外に交渉できる人間としての期待もされている。

線路は、山のふもとを辺りを通過していた。

山は非常に高く、巨大であった。周りがまっ平らな草原であるから、より大きく錯覚してしまう。

そのコントラストは幻想的で、かつての地球のエアーズロックの存在を感じさせる。

あるいはそれ以上の。

線路は、山を少し超えた先で途切れていた。

そこまでは走らせずに、中ほどまで走らせたところで停止させ、そこに第7の駅を造った。

ここまでの距離が非常に長かった為に、真ん中にも一つ造っておい
たのだ。

線路と平行して存在した川も途中で離れていき、この駅の近くには
何もない。

この第6の駅は、「第二草原」と名付けた。

そして、第7の巨大な山の駅は後に「ドワーフの街」と名付けられ
る。

- 1 始まりの駅 清水が湧き、エルフの集落がある。
- 2 美しい湖の駅 透き通った湖がある。主要な飲み水
- 3 稲穂の駅 沼地があり、食糧になりそうな稲穂の仲間が
原生している。
- 4 海の駅 海と隣接している。塩分が含まれているので
海扱いされている。
- 5 草原の駅 草原が広がっている。線路に平行して一本の
川が流れている。
- 6 第二草原 草原が広がっている。なにもない。
- 7 ドワーフの街 巨大な鉱山がある。ドワーフが住んでいる。

山へは道のようなものが続いていた。

何者かが何度も利用しているような風である。

それをたどって行くとこちらに既に気づいているらしい亜人の集団
が警戒しつつこちらをうかがっていた。

世界の創造者、正平である。人間達と取引してやってほしい。正平
は彼らにそう伝えた。

日本語だが、魔力を帯びたその言葉は、エルフとも人間とも違う言
語を操るドワーフ達に

ドワーフ達が使う言葉以上に彼らに意味を伝えた。

すぐに平伏しだす彼らを止め、まず近衛を紹介し、次に人間と取引して欲しいというこちらの要望を伝える。

ドワーフは承諾してくれた。そして正平達を歓迎すべく宴が広げられることとなった。

ドワーフの出す料理は酒が中心で、塩辛いものが多かった。

彼らは男は例外なくひげをたつぷり生やしており、頭のてっぺんからつま先まで強靱な筋肉が覆っていた。

だからといってバカではない。人間と同じぐらいの知能と卓越した匠の技術を有している。

魔法も、炎を操るタイプのものを習得しているらしい。

エルフ程はないが、人間よりは魔力を持っているようだ。

濃い味付けの食べ物はエルフには辛いようだが、人間には酒の肴にちょうどいいものだった。

そして、この世界に来て初めての趣向品、酒だった。

きつく結構な癖がある酒だったが、正平の近衛で改めてよかったと心から感謝する人間2名であった。

ドワーフの鉱山では、鉄鉱石のほかに魔石も出土されるらしい。

魔石は宝石の一種で、カットすることで初めて力を発揮する。

その大きさとカットされた形によって、得られる魔法が決まる。正平もエルフから貰った魔石を自らのインスピレーションでカットしたのだ。

カット方法や、その形は秘伝とされている。

ドワーフの創った素晴らしい工芸品をいくつも見せてもらった。
その中で一番目を引いたものが、サイコロ状の物を生産する不思議な機械だ。

なんでも魔力を固めて好きな時に魔力を取り出せるブロックを造り出すという機械。

大体MP6を消費して、MP5回復するアイテムができるらしい。
また、理論上は同じ形で、MP60を込めてMP50を回復することもできるし、MP600まで込めることもできるらしい。

ただ、ドワーフの最大MPは30ぐらいなので、そこまで込める事はできない。
出来あがったサイコロ状の物は、鈍く銅のような金属で僅かに光を発しているようである。

正平はふと閃いた。
サイコロ状以外の形状はできないかときいたら、割と簡単に変えられるらしい。
それならばと、この機械を譲って欲しいと言った。

ドワーフは渋った。新しく製作すること自体は大した苦労ではないが、
製作するのに膨大な魔力が必要だったのだ。

その理由を聞いた正平は、さっそくこの機会を使って、サイコロ状の魔力の塊を大量に造って見せた。
最初は加減していたのだが、面倒になって行き、魔力の注入量を上げていった。

途中から、出来あがったものが銀白色の輝きを持ちだし、さらにしばらくして黄金に輝き始めた。

この出来あがったモノと交換してくれるように言った。

魔法を使ったわけではないせいか、あの精神の消耗はそれほど起きなかった。

大量のサイコロ。マジックポジションを見たドワーフは二つ返事で譲ってくれた。

ドワーフにとって重要なのは、それを造るときに大量に必要な魔力の方であつた為だ。

出来上がる形状を正平は指定した。3段階の魔力に応じて変わるようなギミックも追加してもらった。

出来あがったモノには、表に電車と線路の絵、裏には数字が刻まれていた。

そう、貨幣である。

都合のいいことに、魔力の出力によって質も色も丁度、銅、銀、金に変わった。

もちろん銅でも銀でも金でも無い。使えば魔力が回復するポジションだ。

後に分かることだが、大量に所持する獣が近寄らなくなることになった。

それはポジション自身の魔力によるものだが、まだこの時点では気づかない。

形作られる数字だけ変えて全て銅にすればいいのに、正平はなんとなく拘った。

しかし、これは後から考えると正解であった。

取引に応じてくれる道具やドワーフ達が欲している商品などを聞いた。

応じてくれるという道具は一気に生活や生産性を改善する可能性を示唆するものばかりだ。

ドワーフ達が欲している対価の幾らかは、すでに調達可能なものだ。

たったのMP3で小さな炎が出せる魔法の力を習得できる魔石から造った宝石を買った。

実はこの魔法習得できる宝石は目減りするものではなく、これを使って何人でも習得可能なのだ。

MP3だから、普通の人間にもほとんど仕える。各駅には炎を管理する者が

昼夜見張っているが、それぐらい炎を起こすのは大変な作業だった。つまり、この魔法は非常に有用である。

魔法は加工された魔石、即ち魔法石を媒介することでMPを消費し効果を顕現させる技術である。

もちろん元の世界である地球にはそのような法則も技術も存在しなかった。

魔法石は補助輪のようなもので何度か使用している内にそれなしでも発動できるようになる。

ただし、なれない内は余計に魔力を消費してしまうというものだった。

正平の創った3つの魔法石で使えるようになる魔法はどれも尋常でない魔力が必要な為に

正平以外が持つても仕方なかった。しかし、今回譲って貰った魔法

石は

人間達に人類史上初めて自ら行使する魔法となるのだ。

新たな通貨をMP貨幣、又は単純に貨幣と呼び、見た目が銅、銀、金のそれぞれ1枚を

5MP通貨、50MP通貨、500MP通貨と呼ぶ事に決めた。

又は単純に、銅貨、銀貨、金貨とも。

今まで暫定の貨幣扱いである巻貝。を貝貨と改め、1MP通貨の価値とした。

6つ目の駅、「第二草原」駅に、ドワーフからもらった貨幣製造機を設置し、

ここに市場を開くことに決めた。

さらに、7つ目の駅「ドワーフの街」駅の間の区間にドワーフだけが利用可能なダイヤを設ける。

そして、運賃として10MP通貨を徴収することとする。

すでに製作した、MP通貨を使ってドワーフの道具と交換した。

なぜ、ドワーフの街に市場でなく、一つ離れたところに造るのか。
一つにドワーフ達としても住処の近くを別種族に荒らされたくは無かった。

もうひとつの理由として、通貨を利用する文化を電車賃を通して理解させたかった為だ。

MP通貨自体にMP回復という大きな利用価値があるのだが、その使い道はあくまで価値の担保としてであり、なるべく通貨として利用して欲しかった。

その考えを根付かせる一端というわけである。

現状は、食糧や道具を調達し、その何割か徴収。それを全体として役立つ仕事をしている人に分配するという、民間人と公務員が半々な状態になっている。調達したモノはその間で物々交換するという具合である。それを補助するように貝貨が使われている。

火の見張りや家畜の世話、成果がでるのがとうぶん先な畑の開発などは、公務員的な立場である。彼らが得られるのは公平ではあるが同じもので、仕方ないとはいえ不公平感はぬぐえない。

そこで、この貨幣を利用するのだ。公務員的な仕事にそれぞれ値段を付けて、定員以上集まれば賃金を下げ、定員を割れば賃金を上げるという仕組みに変えることにした。

そして、食糧調達班は、調達したモノを売らせる。しばらくの間は正平が買い取り貨幣を渡し、買い取ったモノを市場に並べる。物々交換でも貨幣でもどちらでもいいが、保存の効く貨幣が中心に取引され始めるだろう。

さらに貨幣を集めるメリットとして、VIP車両のホテル代にすることとした。最初は安めに、人気が集中するたびに値段を少しずつ上げる計画である。

MP通貨からMPを取り出すにもまた魔法が必要だった。ドワーフはほとんどが習得しているが、それが習得できる魔法石はあえて貰わなかった。

それはまだ必要ないだろうと思ったからだ。
自身も大量のMPをその身に宿しているのでMP通貨から取り出そうとは思わなかった。

かくしてMP通貨経済が回り始めた。

まずは、草原の駅で市場を開かせた。

そして余剰分は第二草原駅へ持って行った。

そこでは、数人のドワーフが市場を開いてくれていた。

人間も何人が常駐してそこで市場を開いている。

タンク車両から水を調達できるようにしてあるが、
ドワーフはこの水にも値段を付けた。

水代わりに酒を飲むドワーフにとって水は貴重なものだった。

鉱山でも水は調達できるが濃厚なミネラルを含み超硬水であった。

飲みすぎると腹を下すほどの。

軟水である川の水に大きな価値を見出したのだ。

鋳、スコップ、のこぎり、釘とあらゆる金具を売りにだしてくれた。
こちらにも、ミルク、卵、羊の毛に余った海産物。すっぱい果物などを提示した。

どちらも最初は物々交換だったが、徐々にMP通貨で取引するようになっていった。

そして値段も落ち着き始める。

ドワーフは時折酒も商品として持ってきてくれた。

これが、人間側にとっては非常にありがたい商品だった。

娯楽の少ない世界においてこの趣向品は貨幣を稼ぐ大きな励みとなつた。

徐々に貨幣での取引が定着し始めると、値段も安定していった。それに伴い、ドワーフと人間の交流も徐々に広がって行く。

ドワーフ達は、第二草原駅までしか足を運ぶ事は無いが、人間に対しては非常に友好的に接してくれていた。

いつの間にか12人目の近衛が誕生していた。

ドワーフの女性ケットである。人間の少女のような姿をしている。非常に力持ちで引きしめられた筋肉を体の内側に隠しているようだ。

エルフの近衛について言及された際に、ドワーフ達も同じように正平の側近を付けたいと申し出たのだ。

ドワーフは暑苦しいからと断ったら、ケットならどうかと言ってきたのだ。

暑苦しくなかったし、エルフの側近もいることだから、別にいいかと承諾した。

ケットは明るく元気な子で、少女の外見と違い中身は大人の知性が秘めた女性であった。

市場がうまく機能しているのをみて、エルフの二エルもエルフ達を参加させたいと申し出てきた。

それならとおなじものを始まりの駅に開いた。

この駅は、エルフに配慮して、探索を終了した拠点であったが、二エルがエルフ達にこの件を話、彼らも乗り気になった為に、市場としてのみその場所を人間側に開放したのだ。

駅の近くの木々を倒し、根っこを掘りぬいてちょっとした広場を設けた。

そこに、エルフは商品を持ち合って市を開いた。

人間も一人か二人そこに常駐するようになり、

ドワーフの市場と、エルフの市場を往復するだけで

ちょっとした財をなした者も出始めた。

基本的に列車は、人間には無料で乗れるようにしていたのだが、全体にそこそこのMP通貨がいきわたったので、乗車運賃を取り始めた。

1駅間を5MP通貨とした。

このときにドワーフの街と第二草原の区間も10MP通貨から5MP通貨に値下げした。

エルフ達はMP通貨からMPを取り出す術は持っていたが、そのように使うよりもドワーフの製作した道具を買う目的で使った方が遥かに有用であると知った為交換の対価としての通貨そのものに価値を見出した。

一部のモノ好きなエルフが電車に乗りたいたいと言い出したので、エルフにもMP通貨を払い利用する術を教えた。ついでにドワーフにも他の区間の利用許可を出した。

しばらく後に、エルフも直接第二草原駅まで買い出しに行くようになり、

そこで店を開くエルフも出始めた。

ちなみにまだ草原の駅は人間だけの市場となっている。

その理由は、正平の牧場などが介入している為に、煩雑にしくなかつたからである。

その代わり、第二草原駅は、完全に自由な取引がなされていた。

第二草原駅は常に食糧が調達できるくらい賑わい始めた。

ここでは、人間の近衛の1人が何人かの部下を連れて市場を仕切っていた。

彼らは、エルフとドワーフの文化を学び、それを伝える役目を負っていた。

治安をまもり汚物の管理なども行い始めている。

区画の整理をし、市が雑多にならないように、広い道を設定したり、廃棄物が散乱しないように、捨てる場所を一か所に決めたりした。

3種族が混在する第二草原に家が出来始めた。

貨物車を製作した為だ。

これをMP通貨でまるまる利用可能にしたことで、石材や木材がこの草原の真つただ中に簡単に運んでこれるようになったのだ。

エルフが木材を、ドワーフが石材をそれぞれ運び込み、店舗兼住居とした。

最初はそれぞれの種族が単独で建築していたのだが、徐々に技術や素材を交換し別種族が協力して建て始めた。

他の駅でもロッジ程度の家は出来始めていた。

それは、ドワーフとの取引により調達可能となったオノやのこぎり、ミノのおかげである。

近代的な大工はそれでかつての家を建てる技術はほとんど持っていなかったが、それをすでに予想して結構な数の宮大工がメンバーに含まれていた。ようやく彼らの本領発揮とばかりに、徐々に家が立ち並び始め、VIP車両とはいかなくても、比較的まともな人間らしい生活が広がり始めた。

■ 人類初の魔法習得 ■

交流が始まる少しまえに、魔法石を一般公開した。
< 小さな火 > M P 3

この世界の魔法の仕組みを人々に説明したのだ。そして、普通の人間に魔法を使わせた。

これは、大きな驚きを持って受け入れられ、何人かはこの世界を選んだ事に心の底から喜んだ。

当初、使用料を取ろうと思ったが、なるべく早くより多くの人に魔法を体験してもらいたかったので、一番人口の多い草原の駅に公共施設として自由に利用できるようにした。

早くて3回、遅くとも20回使えば魔法石無しでも使えるようになるみたいだ。
もちろん、正平も < 小さな火 > M P 3 は習得済みである。

ドワーフから購入した、魔力計なるものも誰でも使えるように公共物として設置した。

これは、自分のMPを知ることができるのだ。
最大MP1000まで計測できる。

当然、正平のMPはカウンターを振り切るので測れない。
しかし、人間程度なら十分である。

最大MPは平均が10であって、結構個人差があった。
なんと、最大MP50をもつ一般人も中には居た。
彼は、元王族らしい。何かあるのかもしれない。

彼らには造幣機械の管理を任せることにした。
又自らのMPで造った貨幣は自分の物にしてよいとした。

■ 04 半年経過 ■

8万居た人口は既に2万人を切っていた。
しかし、その減る勢いもなだらかな傾斜になってきている。

家畜もある程度の柵が造られたため、野獣に食われる被害は格段に減った。

<小さな火>MP3はかなり大勢の人間が習得しているが、それでも連日練習場には長蛇の列ができている。
まだ、習得していない人が並んでいるのだ。

正平は、あれから線路も列車も駅も増やしていない。
魔法も<小さな火>MP3を習得してそのままだ。

焦る必要は無かった。
寿命が無限になった為か妙にスケール感が広がったらしい。
まずは現状を楽しむことにしたのだ。

いまだ大半を正平が斡旋する仕事が大半であるが、それでも徐々に幾多の仕事が発生し、正平の支える手に加わる重みは軽減していった。

家畜は正平の管理下だったが、MP通貨で購入できるようにする検討をしていた。

第二章原に広がる市場で、牛のつがいオークションにかけてみた。
すると思ってもよらないほどの高額で落札された。

落札者はエルフであった。

牛の出す牛乳を非常に好んでいたようだ。

彼は、牛を増やすつもりでいる。

その後人間の技術者をMP通貨で雇ったらしい。

あまりにも好評だったために、定期的に、家畜のオークションを行うことにした。

また、市場ではオークション形式も比較的ポピュラーである。値段が安定し始めた商品は、露天や店舗に出店されているが、新しく出始めた商品は値段が分からなく、

その為にそう言ったものを一括してオークションを行う広場が出来た。

人間、ドワーフ、エルフから毎日のように新しく、価値があるかどうかお互い不明な商品が出品される。

当然掘り出し物もでてくるので、人だかりが1日中でできていた。

ドワーフにとっても非常に貴重な魔石が出品されたこともあったらしい。

その時は大量のMP通貨で人間が落札したらしい。

正平もそのオークションを見るのが好きな1人であった。

ある日、エルフから、魔法石が出品された。

どうも加工に失敗して、微妙な魔法になってしまったらしい。

中身は、＜微消毒＞MP1 という＜解毒＞MP20 の失敗作らしい。

話を聞くとオキシドール程度の価値はありそうだ。

本来極秘技術の結晶である魔法石なのだが、この程度なら別にいいらしい。

しかし、この世界の人類にとっては2つ目の魔法であり、

又この手の技術を持っていなかったドワーフにしても非常に欲しい魔法だった為に

オークションはこの2種族により白熱した戦いが繰り広げられた。

正平もこの戦いに参加したい気持ちでいっぱいだったが、水を差すことになりかねない為に、

参加せず眺めることに決めた。

かつて無い高値がついた。落札者は人間の商人で、最初のころから貿易などでたっぷりの資金を稼いでいた男だ。

しばらくすると、魔法の館なるものを建設し、

ここで1回の使用につき10MP通貨をとるという商売を始めた。

<小さな火>MP3以外の魔法も使いたい人々で連日長蛇の列ができた。

効果は小さくとも<微消毒>MP1は非常に実用的だった。

まだほとんど薬が発見されておらず、<解毒>MP20が使えるエルフには必要が無い為に

代わりの効かない貴重な技術であった。

その様子をみたエルフが、<解毒>MP20で同じようなことをしようと思いが

エルフの集落をまとめる村長がそれを許さなかった。

ただ、結局MP20以上ある人間はほとんどいない為に<微消毒>MP1の方が需要があると思われる。

海辺では河岸が開かれていた。

比較的かつての地球で取れたような魚と同じ姿の生物から、見た事もない異様な生物と

さまざまな魚介類が取れた。

食べれるかどうかは不明だが、徐々に食べれる物と食べれない者、おいしい調理の仕方などの知識が蓄積され始めていた。レンジャーなどが中心になって調べていたようだ、

その作業の際、結構な人間が命を落としているらしい。

やはり、元の世界の常識がなかなか通じないのが原因で、結局食べるまでは分らない。

それでも食べれる種類が増えるにつれ、訪れる人が徐々に現れ出し、血抜きした魚は貨物列車に乗せられ、第二草原の市場まで運ばれる。

また、新鮮な魚を食べる為にここまで足を運ぶ人もいる。

並行して塩田も造られていた。

当然この技術が必要になる事は予想されていたので、人間のメンバーにそうした技術を持った人が含まれていた。ただ、正平の世界解説ではそう簡単に海へ辿り着けるとは予想していなかった為に、あくまで念のため程度であった。

ところが、世界へきて数日と経たないうちに海と遭遇できたのは幸運以外の何物でもない。

さっそく、砂浜と日光を上手く利用した塩田が造られた。

ただ、そのしょっぱい塩化物が本当に塩なのかどうかはわからない。出来た塩は元の世界で食卓に並んでいたものよりも遥かにおいしかった。

ただ塩っ辛いだけでなくミネラルがふんだんに含まれていたのだ。

最初は草原の駅で出品していたが、後に第二草原の市場でも売られる事になった。

第二草原の市場で大人気の商品となった。

ドワーフは岩塩を使っていたが、これは結構貴重らしい。

エルフの食事は薄味だが、塩が手に入るなら使いたかったらしい。

機織りでの日産10人分の衣類だけでなく、エルフ手製の服や、ドワーフが獣のなめし皮から

つくった上着も手に入るようになった。

さらには、エルフの機織り機も購入できるようになり、人間のほとんど全てに服が行きわたった。

食糧も多くの果物の発見と魚介類と奇しくも人口の減少によって、とりあえず大抵の人が毎日食事を口にできる程度までに上昇した。

当初の予想ではもっと人口は減少し、いまだに何日も空腹の日々が続くと思われていた。

しかし、いろんな幸運が重なった。

エルフとドワーフとの交流が持てた事。そしてそれを促したMP通貨の御蔭だと。

混沌とした集団をまとめるのは非常に難しい、食糧が十分に調達できなければ一層難しい。

絶対的な権力を持つのはまだ中学2年生の少年である。

彼が頂点となって共産主義を行うのは困難であった。

有識者はたくさんいたが、被支配層に含まれる彼らが同じ被支配者達を使うのは、使われる彼らも許容しがたい。

しかし、仕事の代価を全て貨幣にし、労力の価値を労働者に決めさ

せることで

支配者がなにかをすることなく上手く回り出した。

買貨の利用もそうだが、すぐに貨幣経済に切り替えた正平は、大英断だったと言える。

このときは正平も知らないのだが、

他の世界の内、貨幣経済に比較的早めに移行したところは生き残り、後回しにした世界は、ひどい有様である。

種が断絶したわけではないが、それまで人類が重ねてきた英知はぶつつり消えるほどの。

貨幣だけが原因ではもちろんないが、貨幣という観点から見た場合はこのような結果になったわけである。

ちなみに、12人中一番最初に貨幣経済に移行したのは正平である。

日本人は清潔好きであった。世界的に見て潔癖というレベルで。

ここまで文化レベルの下がった世界においてもこの性格が変わる事は無かった。

ドワーフの協力もあり、あぶみ鍙が完成した為に馬での探索が可能となった。

そこで、第4の海の駅から海の逆側を探索した一行がとんでもないものを見つけた。

それは、天然の温泉である。

駅からはかなりの距離がある。しかし、噂を聞いた人々は、その湯に浸かりたいと強く願った。

正平が線路を追加すればいいのだが、なんとなく直線にしか敷きたくなかったために、

別の方法を実行しなければならなかった。

そこで、家畜オークションで馬を数頭買い取った人間が、MP通貨を取って送迎を開始した。

このサービスが大人気となり、温泉地にもいくつかの建物が立てられ、

通る道も徐々に整備されていった。

正平も温泉に入りに行った時、非常に気に入った。

しかし、路線の追加はしなかった。初志貫徹が好きな言葉だった。この後も線路はずっとまっすぐ続いて行ったのだ。

しかし、これもまた正しい判断だったと言える。

この御蔭で電車ばかりに頼ることなく、いろんな交通手段が発達することとなった。

この馬車も正平の信念によって生まれたと言えるかもしれない。

実はエルフも清潔好きで、温泉に入るという風習を気に行った個体もちろほら現れた。

普段はもちろん水浴びをしている。

第二草原で井戸を掘る計画が持ち上がった。

食糧調達に振り分けられていた技術者たちが徐々に余裕が出てきた為に起こった現象の一つである。

ここはいまだに第2駅である美しい湖の駅から調達した水に頼っている。

しかし、人数も増えてきており、供給が需要に追い付かなくなってきた。

そこで、現地調達するということである。

すでに、タンクからの水は無料ではない。需要が高い為徐々に値段が上がっていた。

ちなみにタンクの運用権利はオークションで落札される。

水は落札者であるタンク運用者が好きに決めている。

現在タンクは2車両あり、一応独占出来ないように取りきめられている。

井戸の管理と使用料をタンクの給水よりも十分安くできると見積もられている。

人間の技術者と採掘技術の優れたドワーフが協力して、掘り始めた。

何箇所か調査した後、人間の技術者が水脈を探し当て、立派な井戸が完成した。

エルフが水質を調査してくれ、とうとうタンクに変わる新しい水源を確保することができた。

これと並行して、風呂屋を造る勢力があった。

こちらも、エルフとドワーフと人間が協力して造ったものだ。

人間の構想をドワーフの石材で実現し、エルフの解毒魔法の亜種で、何度も貴重な水を使いまわせるように

魔法で管理するものだ。水をお湯にする為の火力はもちろんドワーフが管理している。

その機構を実現したのは、人間の技師であった。

エルフとドワーフのそれぞれの魔法がより効果的に作用する構造。使える建材や素材はまだまだ限られている中で見事な風呂屋を実現した。

温泉まで行く事が出来ず、冷たい水を浴びるのが精々な人々にとっ

て、

この施設は非常に素晴らしいものだった。

毎日入りに来る人間も少なくなく、風呂屋は大盛況であった。

そして第二、第三のお風呂計画も立ち上がるほどである。

同時に人間の衛生と精神の環境が大幅に改善された。

毎日でなくてもたまに入りに来れるだけでも非常に大きな効果があったのだ。

他の駅の近くにも設置して欲しいと言う要望がいくつも上がった。

企画者のエルフとドワーフそして人間は、その成果に非常に満足したのだった。

人間の人口減少も歯止めがかかり、新世界での初めての生命も現れ始めた。

赤ん坊が生まれた世帯には、正平の名で200MP通貨が送られた。このころから食堂や屋台のような既に食べれるものを出す店も始め、

1食分の相場は、5MP通貨前後となった。

貝貨はいまだに補助通貨としての価値を有していた。
海岸で巻貝を集める姿も見かける。

かつての人間の拠点と定め巨大な駅とたくさんのVIP車両を有する「草原の駅」も

3番目ぐらいの人口になっている。

2番目は、河岸と本場温泉で賑わう第4の駅「海の駅」

そして1番賑わうのはもちろん、第6の駅にしてもともと何もなかった「第二草原」の駅近辺。

本来森からでないはずのエルフも永住する勢いの個体がちらほらいるし、

鉾山と鍛冶が命のドワーフも同じようなのがいる。

第二草原は建設ラッシュが続いていた。

そして、この街はいまだに近衛とその側近がしっかりと管理を続けている。

御蔭で乱雑に店などが立ち並ぶ様な事は無く、整然とした道ができあがっている。

駅の前の広場から、広い道路が真っ直ぐ伸びて、

そこから線路と平行に幅員を小さくした道路がいくつも左右に伸びていた。

大きな道路と、駅の近辺は全て商業施設が、枝はの小さな道の面したところには

個人の家が並ぶようになっていた。

大きな道の両脇にはなんと溝ができており、水が流れるように勾配が出来ていた。

近衛が測量師などを雇ったらしい。近衛にはある程度MP通貨を自由にしよう出来るようにしている。

こういう風に使ったかは定期的に報告させるようにしている。

人間から選抜された近衛は基本的に超優秀であった。

それを理解しなるべく自由に行動させた正平も何気に大したものだった。

新しく近衛に参加したニエルとケットは、今のところ正平に知識を与える役目であったが、

気遣う事もなく楽しんでいるようだった。

正平につき従っていた近衛も人間も、語学力抜群の男と入れ替わりに最年少天才少女のジェシーが着いた。

他の二人が女性なので、人間からも女性を付けるといふ余計な世話であった。

ちなみに正平は、創造神という種族扱いされているが、本人は人間のつもりだ。

そんなわけで、正平は何処へいくにも3人の女性をつき従えている。他の近衛の報告はすべてジェシーが受け持っており、ジェシーから大まかな状況をかみ砕いて説明させていた。

ある日、ドワーフから魔石、つまり魔法石の原石が献上された。

市場を開いてくれたことのお礼としてドワーフのまとめ役から送られたのだ。

正平はさっそくカットすることにした。

カットは魔力を使って行う。掌に載せ掴む。いろんなインスピレーションが浮かぶ。

これは魔法の効果よりは出来あがった魔法石の形を思い浮かべている。

出来あがるまでどういう効果をもたらすかは分からない。

ドワーフとエルフは浮かベインスピレーションは代々同じような物で秘伝である。

しかし、正平はそういうものは無い。

カットに消耗する魔法は地味に多く、空を見上げると正平を中心に雲が渦を巻いていた。

こぶしから一瞬閃光が放たれ、掌には美しい宝石、魔法石が残った。
<治療>MP50である。

エルフの系統に似ているが、ニエルはその宝石の見た目とその力に驚きそしてほれと見とれた。

魔法石の出来はカットする人の魔力、技術、インスピレーション、そして魔石の質によって決まる。

高品質な魔石を送られたことに対して直接お礼に行くことになった。

ひさしぶりの「ドワーフの街」駅。その駅はほぼドワーフだけが利用している。

ここに直接買いに来る人間は居ない。ドワーフにせよエルフにせよ別種族に荒らされるのを好まない者は少ない。

始まりの駅でのエルフの店もいつしかさびれて消滅してしまった。たまにエルフと手を組んだ人間が、大量に仕入れに時間を指定してやってくるくらいである。

「ドワーフの街」駅を降りて、最初に見た時よりもはっきりと現れている道を通り、

ドワーフの長へ挨拶に向かう。

そこで、大事故が起きた事をした。

たくさんの技術者が重体になっており、生き延びる可能性は半々の物が数十名。

その中には長も混じっていた。

ドワーフの近衛であるケットもその光景に蒼然となる。

どうやら、家族が含まれていたらしかった。

ちょうどさつき出来たばかりの＜治療＞MP50を彼らに使ってみる事にする。

その膨大な魔法の力は、1人を対象にしても近くの間人もついでに

回復するという

とんでもない効果を発揮した。対象は即全回復した。

ほとんど無尽蔵の魔力を有する正平は、生きているドワーフ全員に対して魔法の治療を実行した。

死んでしまったドワーフを除いて全て完全回復した。長とケットの家族も無事だった。

ケットからも激しく感謝された。

予想はしていたにせよその威力を目の当たりにしてニエルは感心しきりだった。

長たちからは、その魔法に対する対価を払うと言った。

正平は魔石のお礼にきただけで、＜治療＞MP50もそれによって出来たと伝えた。

ならばと、長はまたいい魔石が見つかったら献上するということでは決着した。

大量に使用したことで＜治療＞MP50は習得してしまった。

誰かに譲ってもよかったが、せっかくだし何かの商品にでもしようと考えた。

この魔法石の完成度もエルフやドワーフが見た処、最高傑作レベルで、

いわゆる一つのアーティファクトである。

列車関連の3つもそのレベルと言えなくもないが

使える人間も用途も限られすぎていた。

これを使った習得させて病院でも造るべきなのかもしれないが、あまり魔法に頼りすぎるのは良くない気がしたので保留にした。

しばらくすると第二草原の市場に武器が並ぶようになった。

ドワーフの創る武器は、優秀で質が非常に良い為、容易には別種族に渡したくなかったらしい。

しかし、前回の一件で方針を変えたとのこと。

正平はもちろんのこと、治療と一緒に手伝ったエルフのニエルや、人間のジェシーがにドワーフ達は非常に感謝したらしい。

その為、製作した武器の一部を市場に流すことに決めたとのこと。

いつは探索隊の死亡原因の半分は野獣と戦ったことによるもので、それなりの武器があれば助かった可能性が高かった。

まず、いつも通りオークションに出品された。どれも高値がついたが、その価値は値段以上と言えた。

正平もなんとなく近衛隊全員分の武器を買ってやった。

これは、直接造って貰ったもので、形を統一してもらった。

代価は何度も拒否されたが正平はちゃんと支払った。

12本の剣は、もはや芸術品であった。切れ味の鈍らない魔法がかけてあり

血糊で錆びたりすることは無いらしい。ちなみに正平は嵩張るので貰わなかった。

■とある創造神の世界■

家畜は残り数頭まで減り、寄りそう人間は50人を切ろうとしていた。

一度最高まで引き上がった文化を元始レベルまで戻して生き残るの

は並大抵ではなかった。

まず水場を発見するのが遅れた。

そして家畜に対する人間の割合が大きすぎた。

持ってきた家畜以外の食糧がなかなか見つからず、ついには内部で分裂してしまった。

いくつかの派閥に分裂し、それぞれのリーダーが勝手に旅立ってしまった。

家畜も一緒に持って行かれた。

残ったのは、創造神と一緒にグループ。

旅立った者たちは創造神の恩恵を知らなかった。

それまで一度も遭遇しなかったモンスター。

創造神の一行から離れてしばらくすると唐突に出現したのだ。

まず、家畜がやられ次に人間がやられた。いつしか全滅。

他のグループも大体おなじ。

数人が生き延びたようだが、服すらともに調達できていない状態である。

まもなく彼らも絶命する運命であろう。

創造神含めてだれも気づかなかったが、

創造神は不思議な力で自らの周りをモンスターから守っていたのだった。

長い旅の末に小さな湖とその畔にイチゴのような果物が実っている木を発見した。

彼らはやっと安息の地を見つけたのだ。

みんな感動と嬉しさのあまり涙を流した。

体中傷だらけでひどいにおいがしていた。

ここまで水源すら確保できていなかったのだ。

朝露や僅かな水たまりで凌いでいたという。

この世界に魔法があるかどうかは不明である。

別の一行が確認した生物は全て敵対的で狂暴なモンスターのみであった。

創造神がいったいどんな能力を持っているのかは不明であるが、

魔法以外ならおそらく正平と似たようなものであろう。

新世界に来て僅か半年。20万人居た人口は50人になっていた。

...

光を吸い込むような艶のない暗黒色で扉を象ったかのような造形の魔法石。

<異次元表示偵察>MP1200

正平がオークションで落札した魔石から新たに作成した。

正平が見たのは、別の創造神の世界だった。

この現実を知ったのは、正平と近衛の13人だけである。

もし自分よりも上手く世界を運営しているところが映し出されたら悔しい気がしたので

側近だけで見ることにしたのだ。しかし、そのあまりに壮絶な光景に言葉を失った。

同じ様に発展しているなら公開しようと思ったが、封印することにした。

ここまでひどい状況を晒すような真似をしたいと思わなかったのだ。近くで見えていた近衛達も同じ気持ちだった。

加えて、この世界を選んだ自分と造った創造神にどこからともなく

感謝の気持ちが湧き出した。

別の世界を覗こうとしたが上手くいかなかった。
どうも見た世界に強い精神的なショックを受けてしまったらしく上手く発動しなくなった。

しばらく時間を置くことにした。

まとめ

■登場人物■

創造神

小森正平こもりしょうへい

エルフ

ニエル

ドワーフ

ケット

人間（金髪）

ジェシー

（他9名の近衛隊）

（正平の両親と妹）

別世界の創造神 佐々木玲子ささき れいこ

■駅と近辺の人口■

- | | | | | |
|---|----------|--------------------|-----------|---|
| 1 | 始まりの駅 | エルフの集落エリア | ほぼエルフのみ | 人 |
| □ | 200人程度 | | | |
| 2 | 美しい湖の駅 | 給水場 | 最南端の探索拠点 | 人 |
| □ | 100人程度 | | | |
| 3 | 稲穂の駅 | 田園予定地 | | 人 |
| □ | 500人程度 | | | |
| 4 | 海の駅 | 河岸に塩田 | 温泉街の最寄り駅。 | 人 |
| □ | 3000人程度 | | | |
| 5 | 草原の駅 | 大牧場と、VIP車両配備 | 一番大きな駅 | 人 |
| □ | 2000人程度 | | | |
| 6 | 第二草原 | いつしか巨大な商業地が出来あがった。 | | 人 |
| □ | 12000人程度 | | | |
| 7 | ドワーフの街 | ドワーフの集落エリア | ほぼドワーフのみ | 人 |

□ 300人程度

■魔法一覧■

<列車・顕現>MP2000 (1車両)

<レール・顕現>MP25 (1m)

<駅・顕現>MP9000 (1駅)

<小さな火>MP3 (ライター程度の火を出す)

<微消毒>MP1 (オキシドール程度の消毒)

<治療>MP50 (瀕死から全回復させる超回復魔法)

復魔法)

<異次元表示偵察>MP1200 (別世界の概要を数分間映し出す)

出す)

<解毒>MP20 (現在エルフだけが使用可能)

■MP最大値■(個人&種族値) 12時間で全回復

創造神・正平 MP5200000 (使い続けると増えるらしい)

エルフ・ニエル MP220

ドワーフ・ケット MP70

人間・ジェシー MP20

人間 MP10

ドワーフ MP30

エルフ MP200

■ 05 <造幣機械> ■

しばらくするとまた一部で物々交換が再開され始めた。

市場に物は増えたがMP通貨はあれからほとんど増産していなかった為に

相対的な流通量が減ってしまった為らしかった。

正平は現在の最大価値を持つ貨幣である500MP通貨、別名金貨を造るならともかく

弱い魔力で永遠と出し続けなければならない5MP通貨、別名銅貨を造るのが面倒だった。

しかし、市場で最も必要とされているのがこの銅貨で、だいたい1食分の価値がある。

さらに調査したところ相対的だけでなく、実際にドワーフがMP回復用途という

本来の使い方での消費することがあるらしく、本当に実数が減っていた。

そこで、銅貨を人間に造らせることにした。

<造幣機械>を4つ追加で造ってもらった。

それを、第2〜第6の駅に設置した。

誰もがMP6を消費して5MP通貨をゲットできるようにしたのだ。

これで毎日駅に行けばとりあえず最低1食はありつけるようになったわけである。

まだまだ偏りがあり、丸一日食事にありつけないような人も結構いた。

なるべくそうならないような政策を考えているがそうそう簡単に行

くものではない。

もともと、最低限度を全員に行きわたらせるというのを一つの目標としてきた。

この方法なら、駅に行けばとりあえず1食分ありつける。

単純な施しではない、ベージクインカムとして機能し始めた。

銅貨の流通量が増える。

僅かばかりインフレしたが、許容範囲である。

それに消耗品としてもMP通貨は優秀であつた。

相対的に銀貨や金貨が減ってきたので、正平は一気に増やした。

増やした銀貨と金貨は、第二草原に設置した銀行に保管されここで両替することができる。

銅貨を稼ぎまくった商人が持ち運びの便利な金貨や銀貨に変換しておくのだ。

又ここでは、正平と近衛が出す小切手をMP通貨と交換することもできる。

小切手は現在のところ、羊皮紙に墨で発行者と金額を書いたものである。

絞めた家畜やエルフがとらえた謎の野生動物からとった皮で羊皮紙が造られていた。

まだまだ貴重品で、市場にはあまり出回らない。

10000MP通貨(金貨20枚分)以上から預けることもできる。

これは暫定的に始めたサービスで、普通利息がつくものだが、預け代金として逆に100MP通貨支払わなければならない。

預けた金額の証書が発行され、必要な時に証書と交換で預けたMP通貨を受け取ることができる。

取引額が大きくなってきた一部の商人に人気のサービスとなった。金額が書かれた証書をそのまま同額の商品と交換するといった使い方がなされた。

小切手自体はまだ公平と近衛しか使えない為でもある。

銀行は現在のところ、第二草原にだけある。

その為なお一層第二平原の商業は活発化してきた。

海の駅に支店を出して欲しいという要望もちらほら聞こえてくる。

最初の造幣機械は銀行に保管され、たまに正平がやってきては金貨や銀貨を造った。

普段は近衛の1人が銀行を取り仕切っている。

念のために銀行の警備として常に2人常駐させ、交代制で昼夜問わず守らせてある。

駅に設置されている、造幣機械は連日長蛇の列である。

もう少し増やすべきだと思いつつ面倒なので放置している。

民間でもこの機械の受注許可を求めているようだが、保留である。

ちなみに銀行以外におかれている造幣機械は、銅貨のみを製造できる廉価版である。

さり気なくMPの多いエルフも自らのMPを消費して銅貨を製造する姿を見かけることがある。

一子相伝門外不出の魔法石も、長老の許の元、一部公開許可が下り始めた。

最初に許可があり商売になったのが、ドワーフの秘伝、
<効率上昇エンチャント>MP10
である。

これはのこぎりやスコップなど金属でできた道具にかけることにより作業能率が30%ぐらいUPする魔法である。

その汎用性の高さから、魔法屋ができるやいなや大盛況となった。

消費MPは人間の種族値ぎりぎりであるので何度か通わないと習得できないが、

これも非常に魅力的な魔法であった。

ドワーフも＜微消毒＞MP1で使用料を取る魔法屋の大成功を羨ましげに見ていた為に

このことで溜飲が降った。

さらにドワーフの追撃は続く。

MP通貨を補助にまわし、自分の魔力と同時に消費するアイテムを開発した。

その名もマジックアイテム＜魔法の財布＞

この財布にMP通貨を入れると、自分のMPに財布の中身分のMPが加算される。

そして消費するMPの足りない分は自動的に財布から消費される。

MP最大値の低い人間にとって超絶優れモノであった。

まだ、使える魔法の種類は大した数ではないが、将来的に増えそうな雰囲気がぶんぶんしていた為に、

この＜魔法の財布＞は飛ぶように売れた。

ドワーフ自身もそれまでは、MP通貨やサイコロ化した魔力を自分のMPに取り込むという形をとっていた為、

この財布は本人たちにとってもかなりの発明品だった。

この流れから、潜在的にMP10オーバーの魔法も利用可能になっ

たと理解したエルフ達は

負けじとくろ過>MP15を繰り出した。

これは、そこまでひどくない水を飲める水に変える魔法である。調査隊に非常に重宝される魔法となった。

もちろん、正平は両方とも習得した。

彼らが商売を始める前に優先して魔法石を使わせてくれたのである。

こうして、<魔法の財布>や新たな魔法の御蔭でインフレが止まった。

ドワーフとエルフからの要望で、1番目の駅と6番目の駅それぞれにも造幣機械が設置された。

運賃は、どこまで行っても10MP通貨固定になった。

乗車する際にコインの挿入口に銅貨2枚を投入することになる。投入されたコインはそのまま電車を動かす魔力に変換される。

正平がひそかに改良したのだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9824z/>

新世界の車窓から

2012年1月5日05時46分発行